

論歌謡之? : 文苑

著者	秋月, 胤繼
雑誌名	龍南會雜誌
巻	38
ページ	48-49
発行年	1895-06-30
その他の言語のタイトル	論歌謡之徳 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4611

騎兵の曙は歌

巴城生譯

茜さす 朝日のひかりに わが生命 消え果つべきか うちひく

ラツパの聲と もろどもに 我ら多くの 武夫は

世をぞ去るべき いざ去らむ 是ありしことも

昨日まで 誇れる駒に 胸うたれ 明日は草葉の つゆなれや

今日は矢玉に つきせねど 消ゆべきぞ 花くれなるに そめなせる

うるはしき 姿もやがて 顔せも はこるべきかは ささ匂ふ

なれがほこりの 薔薇も一度は 凋むなり いとやさぎよき うち死を

さればいざ 神のみむねに 任せつゝ 譽をのちに 傳えなむ

とげて騎兵の たけく戦へ ますらをよ

論歌謠之德

秋月胤繼

人生而有性、有性而有情、情之接物而生也、爲喜、爲怒、爲哀、爲愉快、爲怨恨、爲思慕、爲無聊、

稼堂先生曰以夫
字起以雖然字轉
奇崛

又曰着眼甚佳

又曰歌謠之德至
乎此莫尚焉者以
此總收一篇好箇
掉尾

其變化有不可測者焉其發也抑而遏之乎適見其失於激也救之道無他在歌謠而已矣夫歌謠者情之興切發於自然而不可抑且遏者也雖然情有七喜怒哀樂愛惡欲是也而品有三上中下是也上之於七發而皆中節中之於七或中或否下之於七皆不中也由是觀之上之發者歌謠之正也下之發者變也而中之發者乃正變相半也猶末流之從源泉而異其清濁是理之常也要之歌謠者觸時感物情動於中言形於外直言而不足故詠歌之也而有美有醜可以取可以無取也雖然及熟其德之所覃信有浩且大者存焉請試論之余曾讀詩於二南正風則見文王之德化先行於家身脩而家齊而其實延及里巷家齊而國治而其實施及乎天下其德深入于人心其澤廣及物者乃知其德之弘大也及其鄭衛變風則知上無明君賢相而道德頹圯風俗淫蕩而不忍言者在焉然則歌謠者不唯知人之性情亦足以察州國之風氣矣歌謠之德是一也凡人得事理易於諷咏而難於直讀在昔朱子編小學冠以人道之規言而其所以用韻語以擬詩體者蓋使後之學者朝夕諷咏其心與理相涵也而人之所以為人性之所以為性者莫不沛然自得於心焉歌謠之德是其二也凡士之盪其所有而不能施世者多放浪於山巔水崖之外見鳥獸草木風雲變化之狀憂思怨恨鬱積其中則托之於羈臣寡婦之所嘆以發之以伸其情以慰其思焉若幸遇時得行其道則作為雅頌以歌咏聖業以發揚君德歌謠之德是其三也其他或頌壽祝生悼夭吊死皆得以述其情焉歌謠之德一何至於此也且夫歌謠之秀絕者咏歌之以長短清濁之聲和之以十二律所謂八音翕然克相諧可以奏朝廷可以薦郊廟而神人可以和平矣其感應之德奚可測也哉